

自由意志と行為者性

Free Will and Agency

星野 徹*

Toru HOSHINO

非決定論的世界ではあらゆる行為の選択が偶然によることになるため自由意志は存在しないという説を批判的に検討する。第Ⅰ説ではヴァン・インワゲンとメレの説を紹介した後、通約不能な価値の間での選択がいかになされるか検討する。第Ⅱ説では決断すること(decidings)を心的行為の一つと見なす説を考察し、それが行為者因果に訴えることなく出来事因果的に分析できることを示す。第Ⅲ説では、ヴァン・インワゲンやメレの議論は、自由意志と非決定論の非両立性を論証することに失敗していること、決定論的世界においても非決定論的世界においても一定の条件が満たされれば、自由意志が存在し得ることが示される。

キーワード：自由意志、偶然、決断すること

I 自由と偶然

宿題をしようかテレビを見ようか迷ったあげくテレビを見てしまい、宿題が間に合わず翌日担任の先生にしかられるという体験をした人は多いかもしれない。そうした人——たとえば小学生時代の私——は、あの時テレビを見ることをせずに宿題に取りかかることはできただろうか。周りの状況も心の状態もあの時と全く同じであるにもかかわらず、テレビを見たいという欲求に抗って宿題を完成させるということが私にできただろうか。もし、あの時の私にはあのような状況では宿題に取りかかることはどのようにしてもできなかったのだとすれば、翌日、宿題をしてこなかったからといって先生が私をしかることは不当なことになるのではないだろうか。運動会で100mを9秒台で走ることができなかったという理由で私をしかるのとそれは同じことなのではないだろうか。私に100mを9秒台で走る能力がないように、あの時の私には宿題をすることを選擇する能力がなかったのである。

100m走で10秒を切ることができなかったことについて先生が私をしからないのは、私に100mを9秒台で走る能力がないことを先生が知っているからである。宿題についても、それがゲーテの『ファウスト』の翻訳のような法外なものだとすれば、宿題をやってこなかったからといって小学生の私が責められるのは不当なことであると思われるだろう。小学生の私にはドイツ語を理解する能力がないからである。ところが実際の宿題はゲーテの翻訳ではなく算数の問

* ほしの・とおる、埼玉大学人文社会科学部研究科教授、哲学

題を幾つか解いてくるというものであった。私には宿題を完成させる能力があったのである。宿題をやろうと思えばできたのに私が宿題をやろうとしなかったから先生は私に対して怒っているのである。しかし、私はあの時、宿題をやろうと思うことが本当にできたのだろうか。あの時の私にはどのようにしても宿題をやろうという意志を持つことはできなかったのではないだろうか。私には宿題をやろうという意志を持つ能力がなかったのではないだろうか。私が 100m を 9 秒台で走れなかったことについてしかられる理由がないように、私が宿題をやろうとしなかったことについてしかられる理由もやはりないのではないだろうか。

こうして、私が算数の宿題をやらなかったことについて責めを負うのは、私に算数の問題を解く能力があっただけでなく、テレビを見ることを選択するかわりに宿題をするを選択する能力もあの時の私には備わっていたからであるように思われるだろう。ある行為や不作為が賞罰の対象となるのは、行為者が別様に行動することが可能である場合、いわゆる他行為可能性がある場合に限られると考えることは自然なことであるように思われる。この世界でどのような出来事がいつ生じるか、物理法則や神の意志によってあらかじめ決定されていたとすれば、人の行為に責任を帰属させることは不当であることになるだろうし、この世界に自由は存在しないことになるだろう。自由と決定論は両立しないということになるだろう。

自由と決定論は両立しないとする非両立論に対しては、しかしながら幾つかの反論がある。他行為可能性がなくとも行為者に責任を帰することができるようなケースが存在することが示されている¹、さらに、決定論的世界ではなく非決定論的世界においてこそ自由は存在し得ないと考える哲学者もいる。ここでは、非決定論的世界と自由の両立不可能性を示すとされる議論の幾つかを検討したい。まずはヴァン・インワゲンによる思考実験から始めることにしよう(van Inwagen, 1983, pp. 142-145)。

赤いランプと緑のランプとスイッチからなる簡単な機械があるとしよう。スイッチを押すと赤か緑かどちらかのランプが点灯するのであるが、どちらのランプが点灯するかは決まっておらず、赤のランプが点灯する確率も緑のランプが点灯する確率も共に 50% であるとしよう。私がスイッチを押したところ赤ではなく緑が点灯したとしてもそれは私の責任ではないことは明らかである。スイッチを押したら必ず赤いランプがつくようにすることは機械の構造上私にはできないことだからである。脳科学者が二つのランプを小学生時代の私の脳に接続し、赤のランプが点灯した時には宿題をやろうとする意志を引き起こし、緑のランプが点灯した時にはテレビを見ようという意志を引き起こすように調整するとしよう。これは、自由と決定論は両立しないとする非決定論者が考える典型的な自由な行為の場面そのものではないだろうかかとヴァン・インワゲンは問う。しかし、宿題をやらなければという私の思いとテレビを見たいという私の思いが同じ強さを持ち、それゆえ私の思いだけでは宿題をするかテレビを見るか決定されないとすれば、私が宿題をせずにテレビを見たのは単なる偶然だということになるのではないだろうか。非両立論者が、非決定論的世界において自由意志によって私はテレビを見る方を選んだのだと主張する時、非両立論者の言う私の自由の内実は、私がスイッチを押したところ赤のランプで

¹ 代表的な論文として、Strawson(1962), Frankfurt(1969)を挙げることができるだろう。

はなく緑のランプが点灯し、その結果テレビを見ることになってしまったということと変わるところがないのではないだろうか。こうして、私には赤が点灯するか緑が点灯するか選択することができないのと同じように、非決定論が正しければ、私には宿題をするかテレビを見るか選択することはできないことになるだろう。すると、赤ではなく緑が点灯したことについて私に責任がないように、この世界が非決定論的だとすれば、宿題ではなくテレビを選択したことについても私には責任がないということになるのではないだろうか²。

ヴァン・インワゲンによるランプモデルは非決定論的世界における自由意志の不可能性を示す例としては適当ではないように思われるかもしれない。非決定論的世界においては、スイッチを入れたからといって緑のランプがつくことが保証されていないのは確かなことであるが、実際の行為においてスイッチを入れることと緑のランプがつくことの間に対応するのは、テレビを見ようと決めることとテレビのスイッチに手が伸びることの間に対応するのは、テレビを見ようとする意志を持ったとしても、実際に手がスイッチの方向に伸びて行くかどうか保証されていないのである。これはこれで確かに困った事態には違いないだろう。しかし、このことは非決定論的世界においては行為の自由が成り立たないということを示しはするものの、自由意志が存在しないことを示すものではないだろう。宿題をしなかったことについて私に責任はないとしても、宿題をせずにテレビを見ようという意志を持ったという点で、やはり先生は私をしかることだろう。

ヴァン・インワゲンの発想を正確に反映するようなモデルを考案することは容易なことである。たとえばメレは非決定論的世界における行為の生成をランダムな数字発生装置の働きにたとえている(Mele, 2014, p.22)。定期的に一定の数字の中から一つの数字をランダムに発生させる装置があると考えてみよう。装置の内部状態は一定でも、装置がどの数字を発生させるかは決まっていないのである。時刻 t にこの装置が 5 という数字を発生させたとしよう。5 という数字の発生は時刻 t に至るまでの装置の内部状態の結果として生み出されたものではあるが、この装置は全く同じ内部状態から 5 ではなく 7 を発生させたかもしれないのである。非決定論的世界における脳の働きも、したがって、また、心の働きも、ランダム数字発生装置の働きと同じようなのだとメレは言う。私があの時、宿題をするかテレビを見るかを選択したのには単なる偶然なのである。この世界が因果的に非決定論的だとすれば、あの中の私の心理状態と全く同じ心理状態にありながら、私がテレビを見るのではなく宿題をするかを選択することもあり得たのである。しかし、それは私にはどちらを選ぶこともできたということの意味するわけではない。私の心理状態には、私に宿題を選択させる因果的な力も、テレビを選択させる力もいずれも備わってはいなかったということを示すのである。非決定論的世界にお

² ヴァン・インワゲン自身は決定論と自由は両立せず、かつ、自由が存在することは否定できないのでこの世界は非決定論的でなければならないと考えるリパタリアンである。後述のメレはリパタリアニズムに関しても自由と決定論は両立すると考え両立論に関しても不可知論の立場であり、ベレブームは自由は非決定論的世界で行為者因果が存在する場合のみ存在するが、行為者因果は現代の科学と相容れないので自由は現実世界では存在しないと考えるハードな決定論者、あるいは、自由についての懐疑論者である。

いては、人は自らの意志をコントロールすることができないのである。

ヴァン・インワゲンはさらに「巻き戻し」と呼ばれる思考実験も考案している(van Inwagen, 2017, pp. 105-110)。ビデオの巻き戻しのように、全能の神が宇宙の状態を過去の時点まで巻き戻すのである。私がテレビを見るという決断をする直前の状態まで神が宇宙を巻き戻すとしよう。そして、宇宙はその時点からやり直されるとしよう。巻き戻された宇宙で私は宿題をするだろうか、それともテレビを見るだろうか。神が巻き戻しを 500 回繰り返したとすれば、そのうち私は何度宿題を選択し、何度テレビを選択するだろうか。この宇宙が非決定論的だとすれば、すべての回において私がテレビを見る方を選ぶということはないはずである。非決定論的世界では同じ心理状態から異なった選択がなされ得るからである。500 回の巻き戻しのうち、半分の 250 回において私は宿題をし、250 回においてテレビを見たと仮定しよう。神の隣で巻き戻しの様子を見ている人たちがいるとすれば、その人たちは 501 回目の巻き戻しにおいて私はどちらを選択すると予想するだろうか。もちろん私が宿題をするかテレビを見るかは五分五分だと考えることだろう。501 回目の世界で私が宿題を始めたとすれば、見物人たちは、コインを投げて裏が出た時と同じように、それはたまたまのことだと思うだろう。私が宿題をしようがテレビを見ようがそれは偶然の出来事なのである。すべての出来事の生起が偶然であるような非決定論的世界において、どのようにして私に特定の出来事の生起を決定することができるのだろうか。

こうしてヴァン・インワゲンやメレによれば、非決定論的世界においてどのような出来事が生じるか、私たちには決定する能力はないのであり、したがって、非決定論的世界には自由意志も自由な行為もないのである。

しかし、あらゆる出来事が偶然によって生じるとすれば、テレビを見ることに決めたのも、テレビのスイッチを入れたのもこの私であるということが本当に言えなくなってしまうのだろうか。

その前に、そもそも、現実世界において私がテレビを見ることに決めたとき、私の心の中ではどのようなことが起きていたのだろうか。宿題をしようかテレビを見ようか迷い始めてからテレビを見ることに決めるまで、私の心はどのように動いていたのだろうか。私がテレビを見ることに決めたのは午後 7 時 50 分だとしよう。その 10 分前、午後 7 時 40 分に、私は自分がテレビを見ることを選ぶだろうということを知ることができただろうか。もちろんその時間の私は自分が下す決断について何も知らない。自分がテレビを見ることを知っているならば、テレビを見ようか宿題をしようか迷う必要はないし、テレビを見ようかとあらためて決断する必要もない。それでは 7 時 50 分の 30 秒前ならばどうだろうか。その時点で私は来たるべき自分の選択について知っていたらどうか。やはり知らないだろう。私が自分がテレビを見ることになることを知るのには私がテレビを見ることに決めた時である。私がテレビを見る決心をすることによって初めて私の次の行動が決まるのである。これを次のような場合と比べてみよう。

私はコンビニにお昼ご飯を買いに行こうとしている。私には特に食べたいものはなく、カロリーも塩分も気にしていない。私はこの後自分がコンビニで何を買うことになるか知っているだ

ろうか。やはり知らないだろう。私はコンビニにどのような食べ物が置いてあるのか知らないからである。私はコンビニで目にとまったものの中からおいしそうなものを選んで買うのである。私はおにぎりサンドイッチの棚を見た後、サンドイッチを買うことにした。私がおにぎりではなくサンドイッチを選んだことは偶然だろうか。これもある意味では偶然のことである。その時にはサンドイッチは売り切れていてサンドイッチの棚には何もなかったかもしれないからである。それでは、コンビニの品揃えも、コンビニの中での私の動きや私の視線の方向も、私の体調や食欲や味の好みや心理状態も全く同じであるにもかかわらず、私はサンドイッチではなくおにぎりを選ぶというはあり得たのだろうか。神が宇宙を巻き戻したところ、巻き戻す前と寸分違わぬ状態に置かれた私が、今度はサンドイッチではなくおにぎりを選んだということがあり得るだろうか。もしそのようなことが起きたとすれば、神のとなりで私の行動を見ている人は、巻き戻す前の私と巻き戻した後の私は、一見同じように見えるものの味の好みが変わっているのだと考えるのではないだろうか。私がサンドイッチを選んだのはサンドイッチの方がおにぎりよりおいしそうだったからである。選択が対象のおいしさという一つの基準のみによってなされる場合には、味の好みが変わっていなければ、何度巻き戻しても私はサンドイッチの方を選ぶはずだ、と考えるのが自然なのではないだろうか。たとえば、私が事前にコンビニに何があるか知っていたとしよう。あるいは、コンビニにある品物と同じ種類のサンプルが目の前にあるとしよう。そうすれば、私はコンビニに行く前に自分がこれから何をかうか知ることができるだろう。私はおにぎりではなくサンドイッチを買うことだろう。目の前のサンドイッチの方がおにぎりよりおいしそうに見えるからである。コンビニのケースにおいて、未来の自分が何をau選択するか知ることができないのは、未来の時点で私の外の世界がどのようなになっているか私には知ることができないからである。未来の外界のあり方を完全に知ることができれば、私はその時にどのような選択をするか知ることができるはずである。

これは、この世界が決定論的であるということをも前提としている議論であるように思われるかもしれない。しかし、それでは、私の味の好みと食べ物の選択に関して非決定論的であるような世界とはどのような世界なのだろうか。私の味の好みめまぐるしく変わるような世界なのだろうか。そうではないだろう。私の味の好みめまぐるしく変わるように決定されている世界というものを考えることができるからである。そうした世界では、私は日によって甘いものが好きだったり、辛いものが好きだったりするのである。自由意志の議論で問題とされる非決定論的世界とは、全く同じ心的状態から異なった選択が生じることがあるような世界である。それは、この場合、私はおいしさ以外には考慮に入れておらず、しかも、おにぎりよりサンドイッチの方がおいしそうに見えるにもかかわらず、私はサンドイッチではなくおにぎりをau選択することがあり得るような世界のことを意味することになるだろう。しかし、現実の世界でこのようなことが生じるとは考えられないことである。おいしいものをかうとコンビニに行き、サンドイッチの方がおいしそうだと思いつながら、おにぎりをau選択してしまったとすれば、統合失調症におけるさせられ体験のように、その選択は私自身によるものではないと私には感じられることだろう。私はおそらく外部からの力によって意に染まない選択をさせられてしまったのであ

る。私は自らの意志をコントロールする力を失ってしまったのである。現実世界における人間の心はこうしたことが起こらないほどには因果的に決定されていると言って良いように思われる。

宿題に取りかかろうかテレビを見ようか迷っている時の私は、これからコンビニに行っておにぎりかサンドイッチを買おうと思っている私と全く異なった状況にいるのはもちろんのことであるが、店内でおにぎりやサンドイッチを前にしてどちらもおいしそうに見えるビュリダンのロバのような私とも似て非なる状態にある。コンビニのケースにおいて私に関心があるのは対象のおいしさだけであり、私は様々な商品の中から一番おいしそうなものを選ぶのである。甲乙つけがたければ、私は、たとえば、たまたま一番近くにあったり、レジのそばにあったり、人で混み合っていない棚に置いてあったりするものをさして迷うこともなく選ぶことだろう。それに対して、宿題とテレビの間の選択はそれほど簡単に決着が付くわけではない。私はテレビを見たいと欲している一方、宿題をやらなければという義務感のような感情にせき立てられてもいる。宿題をすることにはテレビを見ることによって得られる楽しさが伴うことはないものの、宿題をやって行かなければ明日先生にしかられることになるだろうし、算数の成績も下がるかもしれない。宿題をするという行為の持つ好ましさの度合いとテレビを見るという行為の持つ好ましさの度合いは全く異なる、通約不可能な種類のものである。こうして、私は二つの通約不可能な尺度によって評価される行為を比較し、そのうちの一つを選択するという課題に直面しているのである。昼食の場合でも、たとえば私がカロリーを気にしているとすれば、高カロリーでおいしそうなもの、低カロリーであまりおいそうではないものを前に似たような状況に置かれるということもあるだろう。

コンビニにお昼ご飯を買いに行こうとしている私が、自分が何を選ぶことになるか知ることができないのは、私がコンビニに何が置いてあるか知らないからである。外界に関する情報の欠如が私の無知の主たる要因である。確定した選択肢が私にはまだ与えられていないのである。宿題とテレビの間で迷っている私に関してはそうではない。選択肢も選択肢の内容もすでに確定している。宿題の課題もテレビの番組も私は知っているのである。私に知ることができないのは私の心がこれからどのように動いて行くかということである。私は今現在の自分の心の状態についてはよく知っている。自分が何を欲しているか、欲しているものを手に入れるためには何をすれば良いのか良く知っている。テレビを見るにはスイッチを入れれば良いのだし、宿題をするためには机に向かって教科書とノートを開かなければならないのである。しかし、このような状態にある私の心がこれからどのように変化して行くか、私には知ることができないのである。こうした状況は、難しい算数の問題を解いている子供の置かれた状況に良く似ている。問題を解いている最中の子供は、自分がこの後どのような答えを出すことになるのか知ることができない。自分の心がこれからどのように働くのか、その結果がどのようなものになるのか、その子は知ることができないのである。それがあらかじめわかっているのなら、あらためて計算する必要などないことになってしまうだろう。同じように、宿題をしようかテレビを見ようか迷っている私は、通約不可能な二つの価値を比較するという、こちらは正答のない難問を解決しようと悪戦苦闘しているのである。そして、悪戦苦闘の結果どのような解答が出されるのか私には予測がつかない

いのである。それでは、何が私をテレビを見るという解答へと導いたのだろうか。

それぞれが異なった種類の価値を帯びる二つの行為の間で選択を迫られている時、たまたまテレビが机といすより近いところにあったから宿題をしないでテレビを見る方を選択した、というように、外的な偶然によって無自覚の内に私の選択が引き起こされるということは私の場合ほとんどないように思う。この点で、おいしさだけを選択の基準としている人が、多くの有力な候補の中から、たまたまレジの近くにあったサンドイッチを選ぶといった場合とは行為へ至る道筋が異なっているように思われる。私はテレビ中継される野球の試合の内容を想像したり、翌日、クラスで前夜の試合の話題で盛り上がっている中で、テレビを見なかった自分が1人取り残されている様子を思い浮かべたりする。また、宿題をしてこなかったといって先生にしかられ、廊下に立たされている自分の姿が頭をよぎったりもする。こうして、どちらを選ぶか決めあぐねているうちに、ふと「今日は大事な首位攻防戦だからいつもの試合とは違う」という考えが浮かび、私はテレビのスイッチを入れるのである。食べ物の選択でも、カロリーが高くておいしそうなもの、低カロリーで食欲をあまりそそらないものの中で葛藤している場合には、たまたま手近に置いてある方を選ぶなどということはあるそうもないことのように思われる。どちらにしようか迷っていると、「一度ぐらいカロリーを高いものを食べてもどうってことはない」という悪魔のささやきが聞こえてくる。そして、その人は高カロリーのおいしそうな食べ物を選ぶことになるのである。

異なった種類の価値を持つ行為の間での選択には、ほとんどの場合、正当化、あるいは言い訳が伴っているように思われる。私たちは、正当化の一言、あるいは言い訳を思いついた後で初めて一方を選択することを決断するのである。このような正当化は、二階の意志に反する行為を選択する場合にのみ要求されるわけではない。宿題は欠かさずやろうと心に決めている子供が、テレビを見ることを諦めて宿題をすることを決断する場合にも、「今日の試合で優勝が決まるわけじゃない」というテレビを見たいという欲求をなだめる一言や、「最近の先生は怖い」という宿題をすることを促す一言を思いつく必要がある。こうして、選択肢が合理的なものであると自分に言い聞かせながらそちらを選ぶ決断をするのである。

行為者を決断へ導くこのような正当化の一言は、行為者が意図的に生み出すものなのだろうか。そうではない。人は特定の文を意図的に頭の中で復唱することはできるが、新たな思考を意図的に頭の中に思い浮かべることができない。芭蕉の句を意図的に思い浮かべることができても、著作の始まりの一言を意図的に思い浮かべることができない。作品をどのように始めようかと考えているうちに、ふと適当な文が浮かんでくるのである。そして、たとえばトルストイはそうして浮かんできた「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどれもその不幸の趣が異なっているものである」という文を小説の冒頭に置くことにしたのである。

ふと頭に浮かんだ正当化の一言によって選択が導かれているとすれば、その選択は行為者のコントロールが及ばない出来事を原因として生じたものだと見なす他ないように思われる。それでは、私が宿題とテレビの間で迷っている時に、「今日は大事な首位攻防戦だからいつもの試合とは違う」という言葉が浮かんだのは偶然なのだろうか。そして、「今日は大事な首位攻防戦

だからいつもの試合とは違う」ではなくて、「今日の試合で優勝が決まるわけじゃない」という一言が思い浮かぶ可能性もあったのだろうか。哲学論文執筆のような知的な創造活動を行っている場合、思考に行き詰まり、考えあぐねている最中に、ふと新たな考えが頭に浮かび、そのことによって以後の論文の方向性が決まるということが良くある。そのような時には、あのような考えが浮かんでこなければ論文は全く異なったものになっていたことだろう、と感じられる。私にそのような考えが突然浮かんできたとすれば、それは偶然のことなのだろうか。そのときの私の心的状態と全く同じ状態でありながら、別の考えがふと浮かんできたり、あるいは何の考えも浮かんでこなかったりするといったことがあり得たのだろうか。それとも、宇宙を何回巻き戻しても私にはその都度同じ考えが浮かんでくるのだろうか。いわゆる現象学的考察のみによって上の問いに答えを出すことはできないだろう。私の心の働きを内省してみても答えは出てきそうにない。上の問いは、一部は、脳の働きに関する自然科学の問いでもある。では、仮に私に特定の言い訳が浮かぶことが偶然だとすれば、ヴァン・インワゲンやメレが言うように、私がテレビを見てしまったことに関して私の責任はなかったということになるのだろうか。すると、また、トルストイが『アンナ・カレーニナ』の書き出しの印象深さによってこれまで受けてきた称賛は不当なものであったということになるのだろうか。

II 行為者因果と決断すること

ペレブームもヴァン・インワゲンやメレと同じように、ある種の非決定論のもとでは自由意志の存在が脅かされることになることを主張している。

行為者の道徳的な動機はある決断を支持し、打算的な動機はその決断を控えることを支持し、さらに二つの動機の強さは同じであるというような状況を考えてみよう。出来事因果的リバタリアンの描像によれば、決断に先立つ因果的条件が (...) 決断が生じるかどうか決めることはないのであり、それはただか決断が生じる確率を 50%とするに過ぎないのである。実際のところ、先行するいかなる出来事も決断が生じるか否か決めることはないのであり、決断について因果的関連性をもつのは先行する出来事だけなのであるから、いかなる出来事も決断が生じるか否か決めることはないということになる。こうして、行為者も行為者に関わる何ものも決断が生じるか否か決めることはない。したがって、行為者は基本的な賞罰に関する道徳的責任のために必要とされるコントロールを欠いていることになるのである (Pereboom, 2014, p. 32)。

ペレブームによれば、世界が非決定論的であり、さらに、すべての因果関係は出来事間の関係であるとすれば、行為者は特定の行為をなすという決断を下す因果的力を持たないことになり、道徳的責任を負うために必須とされる自らの振る舞いを制御する能力を欠くことになるのである。ただし、非決定論が自由意志の存在を脅かすのは行為者そのものが行為の直接の原因である

とする行為者因果説が成立しない場合である。行為者が直接決断を引き起こすことができれば非決定論的世界において自由意志は存在することができるかとペレブームは言う。行為者が直接決断を引き起こすことができるとは、行為者が行為を選択する能力を持つことに他ならないからである。こうして、偶然思い浮かんだ「今日は大事な首位攻防戦だ」という言い訳に後押しされてテレビを見る方を選んだとしても、テレビを見るという決断が私によって直接生み出されたものである限り、ペレブームによれば、宿題をせずにテレビを見たことへの責任は私にあるのである。一方、ヴァン・インワゲンは、行為者因果説を持ち出してきて何の解決にもならないと言う。テレビを見るという決断が私自身によって引き起こされたのだとしても、テレビを見るという決断が私が引き起こしたという事態は、非決定論的世界においては、偶然生じたものである他はないからである(van Inwagen, 2017, *ibid.*)。ペレブームとヴァン・インワゲン、どちらが正しいだろうか。まずは、決断するとは一体どのようなことなのか考察しておこう。

私がテレビを見ることに決めるとは、「私はテレビを見ることにする」という文が私の頭の中に浮かぶことでもなければ、「私はこれからテレビを見る」という信念を私が獲得することでもない。私がテレビを見ることに決めることなしに「私はテレビを見ることにする」という文が私の頭に浮かぶことはあり得ることである。また、自分はこれからテレビを見るという信念を私が持つことになるのは、私がテレビを見ることに決めたからである。私がテレビを見ることに決めるとき、私は決断するという一つの心的行為を遂行したのであり、その心的行為の結果として、私は自分がテレビを見るだろうという信念を持つに至るのである。

ところで、ピーコックは「決断すること(decidings)」を、「計算すること(calculatings)」や「推論すること(reasonings)」などと共に心的行為の一種として挙げた上で、心的出来事が心的行為となるのは心的出来事が「試みること(trying)」をその構成要素として含む場合であると述べている(Peacocke, 2007, p. 361)。単なる手の上昇と手が上がることの違いが、後者は手を上げようと試みることによって生じた手の上昇であるという点にあるのと同じように、たとえば、計算することとは計算しようと試みることによって引き起こされた心的活動なのである。すると、身体運動における手を上げることと手が上がることの違いと類似の違いが心的出来事においてもあることになるだろう。ピーコックが指摘するのは想像のケースである。ある風景がふと思い浮かぶこともあれば、同じ風景を意図的に思い浮かべる場合もある。ある風景を意図的に思い浮かべるとは、その風景を思い浮かべようと試みることによって、その風景が心の中に出現することである。そのとき、その人は想像するという心的行為を遂行したことになるのである。

ピーコックの説は行為の気づき(action-awareness)に伴う能動的な感じをうまく説明してくれる。手を上げることには単なる手の上昇の場合とは違う、自分が手を上げているという感じが伴う。また、人の顔を思い出そうとして思い出した時には、その人の顔がふと浮かんで来た場合にはない、自分が顔の姿を呼び起こしたのだという能動的な感じを私たちは持つ。こうした能動感を、ピーコックは、試みること(trying)が出来事を引き起こしたことの気づきとして説明するのである。膝蓋腱反射によって脚が上がる場合や人の顔がふと浮かんでくる場合は、それらが試みることによって引き起こされたものではないゆえ、それらの出来事が能動的な行為として感

じられることがないのである。行為の気づきの内に試みることの気づきが含まれているということを見て取るには、失敗した行為について考えてみれば良い。手が麻痺している人が手を上げようと試みたところうまく上がらなかったとしよう。その人は手を上げようと試みたがうまく行かなかったと気づくだろう。また、忘れてしまった人の名前を思い出そうとしている人は、自分が名前を思い出そうと試みているということに気づいているだろうし、幾何学の証明を見いだそうとしているものなかなか見つけられないでいる人は、自分が幾何学の証明を見いだそうと試みているということに気づいているだろう。こうした人たちは試みが空転していることに気づいているのである。

行為の分析としても行為の気づきの説明としても、ピーコック説は優れたものであるように思われる。しかし、決断することに関してもピーコック説は妥当するだろうか。決断することが心的行為の一種だとすれば、決断するとは、決断しようとするによって何らかの心的出来事が引き起こされることであるはずである。それでは、決断しようとするによって引き起こされる心的出来事とは一体いかなるものなのだろうか。人の名前を思い出そうと試みるとは、人の名前の出現という心的出来事を、また、幾何学の証明を見いだそうと試みるとは幾何学の証明の発見という心的出来事をもたらそうとすることである。決断しようとするにおいて、名前の出現や証明の発見に相当するものは果たしてあるのだろうか。テレビを見ることを決断しようとするとは、「私はテレビを見ることにする」という文を思い浮かべようとするだけでもなければ、「私はこれからテレビを見る」という信念を獲得しようとするということでもないということはあるのだろうか。また、決断することが決断しようとする試みだけが残ってしまったといったことがあるのだろうか。テレビを見ることを決断しようとする試みでの失敗に終わったとは、結局、テレビを見ずに宿題をしたということでないとは一体いかなることなのだろうか。テレビを見るという決断に、テレビを見るという決断をしようとする試みが含まれているようには私には思われない。そうだとすれば、決断するという心的行為は、試みることという先行する心的出来事によって引き起こされたものではなく、行為者が直接引き起こした行為者因果の一例ということになるのだろうか。

想像すること、思い出すこと、考えること、計算することと決断することには大きな違いがある。正7角形の姿を想像しようとする、人の名前を思い出そうとすること、3桁の暗算をすること、これらはいずれも心のうちに新たに何かを生み出そうとすることである。正7角形の姿を想像しようとしている人の心には正7角形の像はまだ出現していないし、人の名前を思い出そうとしている人にはまだ人の名前は浮かんでいない。だからそれらを生み出そうと試みているのである。また、自由意志と決定論の問題について考えている人は自由意志と決定論の関係について整合的な思考を生み出そうとしているのである。想像すること、思い出すこと、考えること、計算することは何かを心の内に創造することなのである。それに対して、宿題をしようかテレビを見ようか決断しようとしている私の前にはすでに選択肢が現前している。したがって、

決断するとは決断の対象を心の中に創造することではない。それでは、決断しようと試みるとはどのようなことなのだろうか。

決断において、思い出そうと試みたり想像しよう試みたりすることに対応するのは次のような状態であるように思われる。宿題をしようかテレビを見ようか迷っている私は、宿題の内容を思い浮かべたり、先生の怒った顔を想像したり、学期末に渡される通信簿のことを考えたり、テレビ中継の内容を想像したり、などなどを繰り返すだろう。私の心は二つの選択肢の間で揺れ動いている。私はどちらかを選択しようと試みているのである。こうして揺れ動く私の心は、やがて、「今日の試合は大事な首位攻防戦だ」という一言と共にテレビを見る方へと定まるのである。テレビを見ることに決めることが一つの心的行為であるとすれば、その行為は、私がどちらにするか迷い始めてから心が定まるまでの時間にわたって継続する心的過程であると考えられるべきであるように思われる。すると、通常、決断することとして見なされている心的過程を締めくくる最後の出来事は、それ自体が行為であるのではなく、行為を構成する一つの心的出来事であるということになるだろう。「テレビを見ることに決めること」と日常的に言い表される事態は、忘れていた名前を思い出すことにはなく、忘れていた名前が思い出そうと試みた結果心の中に出現することに対応するのである。また、通信簿のことを考えたり、試合内容を想像したりすることは、名前を思い出そうとして頭の中で「あいうえお」順に音を組み合わせることに相当するだろう。心的行為の一種としての「決断すること」とは、心の向きを定めようと試みることによって心の向きが定まることなのである。テレビを見ることに決めるという心的行為に試みることが含まれていないわけではない。しかし、テレビを見ることに決めるという心的行為に含まれるのは、日常的表現から類推されるように、テレビを見ることに決めようと試みることではなく、宿題をしようかテレビを見ようか、どちらにしようかとにかく心を決めようと試みることなのである。

ただし、想像することや思い出すことと決断することの間には違う点がもう一つある。想像することや思い出すことについては、対象の像が出現してしまえば行為は完遂されたことになる。決断が生じた時刻と決断された行為が行われる時刻が離れている場合は事情が異なる。テレビの野球中継を見ることに決めたのが午後 7 時 50 分であり、野球中継が始まるのが午後 8 時だったとしよう（私が小学生だった頃のプロ野球中継は午後 8 時から始まるのが普通だった）。その 10 分の間、私はテレビを見る方へと傾いた自分の心を維持し続けていなければならない。買い物の品目を覚えた後、それらを買った物が終わるまで忘れずに頭の中にとどめておくのと同じである。買物をする人は買うべきものを覚えておこうと試みるだろう。また、禁煙することに決めた人はタバコを吸うまいと不断に試みることだろう。一度テレビを見ることに決めた私は、同じように、算数の教科書が気になっても教科書を開かないように努めるだろう。禁煙することに決める場合や、10 分後にテレビのスイッチを入れることに決める場合、決断するとは、決断した時点における心の傾きをある特定の時点まで、また、禁煙の場合ならば生涯にわたって、維持し続けようと不断に試みることなのである。もちろん、こうした試みは常に成功するとは限らない。タバコの誘惑に負けてタバコに手を出してしまう人がいるように、テレビを見ること

に決めた私は、教科書を開いて宿題を始めてしまうかもしれない。人は心変わりするものなのである。

決断することに関する以上のような分析が正しいとすれば、テレビを見ることに決めた私は行為者因果説が言うような行為者性を持っているということになるのだろうか。そのようには思えない。最終的な私の心的状態は私が直接生みだしたのではなく、様々なことを思い浮かべたり考えたりした末に生じたものだからである。

Ⅲ 因果と責任

それでは、結局のところ私が宿題をせずにテレビを見たことについて私に責任はあるのだろうか。私が宿題をせずにテレビを見ることに決めたのは、もしかすると偶然のことかもしれない。また、テレビを見る方へと私の心が傾いたとしても、行為者としての私が直接そうした状態を生み出したわけでもなさそうである。それでも、宿題をやらずにテレビを見たことに対して、担任の先生は私をしかる権利を持つのだろうか。

現実世界には厳密な心理法則は存在しないかもしれない。神が宇宙を何度も巻き戻せばそのうち幾度目かには私はテレビを見ることを諦めて宿題をする決断をしているかもしれない。しかし、現実世界における私の心の動きはまったく無秩序であるというわけでもない。宿題をしようかテレビを見ようか決断しようとしている私の心に、「今日の試合は大事な首位攻防戦だ」というささやきのかわりに「今日の試合で優勝が決まるわけじゃない」という言葉が聞こえてくることはあり得るが、「夜の浜辺は気持ちがいい」という言葉がふと浮かんでくるなどということはずもない。また、仮にそうした言葉が思い浮かんだとしても、それによって海へ行こうと気持ち切り替えるなどということもない。私の心に「今日の試合は大事な首位攻防戦だ」という言葉や「今日の試合で優勝が決まるわけじゃない」という言葉が湧いてくることあり得るのは、私がテレビで野球の試合を見たいという欲求を持っているからである。テレビで野球の試合を見たいという欲求を持つ人の心は、その人を野球の試合を見るためにテレビのスイッチを入れるという行為へと導く傾向性を持つ。また、野球の試合を見るためにテレビのスイッチを入れるという行為への踏み台となるような出来事をその人のうちに引き起こす傾向性を持つ。野球を見るためにテレビのスイッチを入れたとき、その傾向性が発現し、欲求が満たされることになる。また、「今日は大事な首位攻防戦だ」という言葉が浮かぶことも、それによって欲求が満たされるわけではないとしても、欲求の発現の一つであることに変わりはない。「今日は大事な首位攻防戦だ」と思うことは、野球を見るためにテレビのスイッチを入れるという行為へと至るための一つのステップとなり得るからである。逆に、「今日の試合で優勝が決まるわけじゃない」という言葉は、テレビを見たいという欲求に対立する、宿題をしなければならぬという思いが発現したものである。それゆえ、テレビを見たいという欲求と宿題をしなければという思いがせめぎ合っている人の心に「夜の浜辺は気持ちがいい」という言葉が浮かぶことはないし、万が一浮かんだとしても、それは、対立する二つの欲求から発したのではない単なるノイズとしてすぐに

消えて行くのである。また、『アンナ・カレーニナ』執筆中のトルストイに「独り者で財産がある男は妻を欲しがっているに違いない、というのはあまねく認められた真理である」などという文句が浮かぶことはありそうにないし、たとえ浮かんだとしてもそれが『アンナ・カレーニナ』の冒頭に置かれることはないのである。

傾向性を出来事の原因と見なすのは正当なことである。地震で橋が倒壊したとしよう。橋が倒壊したのは地震で地面が揺れたからである。地震が倒壊の引き金を引いたのである。その意味で、地震は橋の倒壊の原因である。しかし、地震で倒壊したのはその橋だけで、それ以外の橋はびくともしなかったとしよう。なぜだろうか。設計ミスで、橋が壊れやすい構造をしていたからである。橋が壊れたのは橋がもともと壊れやすい構造をしていたからでもある。橋の設計者が橋の倒壊の責任を負わされるのは当然のことである。橋の設計者は橋の倒壊の原因を作った張本人だからである。「地震が起きなければ橋は倒壊しなかったはずだ、だから橋の倒壊の原因は地震にあるのだ」と設計者が言っても、誰も聞き入れてくれないだろう。壊れやすさという橋の傾向性は地震の揺れと相まって橋の倒壊を引き起こしたのである。「なぜ橋が崩れたのか」と問われれば、まずは「地震があったからだ」と倒壊の引き金を引いた出来事を持ち出すことによって答えるのが普通である。「なぜあれぐらいの揺れで倒壊してしまったのか」とさらに問われれば、「橋の構造に問題があったからだ」と答えるだろう。傾向性による説明は、なぜある出来事が別の出来事を引き起こしたのかという問いに対する答えとして持ち出されるのである。

宿題をせずにテレビを見てしまった私についても同じことが言えるように思われる。非決定論的世界においては、テレビを見るという決断に至るまでの決定論的な出来事の因果連鎖は存在しない。また、行為者が直接自分の心的状態を引き起こすということもないのかもしれない。しかし、それでもテレビを見るという決断は私の心の内から生じてきたものであることに変わりはない。私は元々テレビを見たいという欲求を抱いていたからである。橋の倒壊において橋の壊れやすさが顕在化したように、テレビを見るという私の決断において、テレビを見たいという私の欲求が顕在化したのであり、テレビのスイッチを入れることによって私の欲求は実現したのである。また、非決定論的世界において、私はテレビを見るという決断ではなく、宿題をするという決断をしていたのかもしれない。その場合は、宿題をしなればという私の思いが顕在化したことになるのである。

ところで、物の傾向性を物の持つ力と見なすことができる。砂糖が水溶性を持つとは砂糖が水に溶けるという力を持つということであり、橋が脆いとは橋が少しの衝撃で崩れ落ちるという力を持つことである。砂糖が水に溶けることにおいて、また、橋がわずかの揺れで倒壊することにおいてそれらの力が発揮されたのである。ただ、非決定論的世界においては、どれほどの刺激を加えれば力が発揮されることになるか、はっきりしたことは言えない。同じ構造の橋でも、同じ強さの揺れで倒壊することもあれば無傷のままであることもあるだろう。それでも、やはり、橋が崩れてしまえば橋の脆さが顕在化したと見なされることに違いはない。同じ構造の橋がそよ風で倒壊したり、震度 7 の揺れでびくともしなかったりするようなアナーキーな世界において、物に傾向性を帰属させるなど無意味なことだろう。現実世界はたとえ非決定論的であつ

たとしても、傾向性概念が無意味になるほどの無秩序な世界ではないということは明らかである。

傾向性が力ならば、テレビを見たいという欲求も宿題をしなければという思いもやはり心の持つ力である。テレビを見るという決断をすることにおいて私の心はその力を発揮したのである。そうだとすれば、この世界がたとえ非決定論的な世界であったとしても、私の決断の責任を私が負うのは当然なのではないだろうか。私がテレビを見るという選択をしたのがたまたまのことであったとしても、その選択は私の欲求によってもたらされたものだからである。

しかし、ヴァン・インワゲンもメレも非決定論的世界において人は自らの意志をコントロールする力を持つことはないと言う。また、ペレブームは行為者因果が成立しない世界ではやはり人は自分の意志をコントロールすることができないと言う。彼らが言う意志をコントロールする力とは一体どのようなものなのだろうか。

手を思うように動かせない人は手をコントロールする力を失っていると言われるだろう。すると、意志をコントロールする力がないとはたとえば次のようなことだろうか。禁煙を決意したのにすぐタバコに手を出してしまう人やテレビを見ようと決めたのに宿題をやってしまう人は意志をコントロールする力がないということになるのだろうか。こうしたケースは日常生活において頻繁に起きることである。哲学の問題を考えようと思っても集中できずに思考がさまようことはしばしばあるし、忘れてしまいたい人の顔が浮かんできて振り払うことができないということもあるかもしれない。名前を思い出そうとして思い出せない場合や、正 7 角形の像を思い描こうとしてもなかなかうまく行かないといった場合もあるだろう。これらはいずれも心的状態を一定の時間維持したり、あるいは、新たな心的状態をもたらそうとしたりする試みがうまく行かない場合である。こうした場合において、私たちは自らの心的状態をコントロールする力を欠いているのである。しかし、これらは決定論と非決定論の問題とは無関係である。こうした意味でのコントロールする力の欠如は、決定論的世界においても非決定論的世界においても生じ得ることである。

ヴァン・インワゲンやメレやペレブームが念頭に置いているのはこうしたケースではない。彼らが問題とするのは、宿題とテレビの間で迷う私のように行為者が行為 a と行為 b 二つの選択肢の間でどちらかを選ぶという場面である。行為者には a を選ぶ理由も b を選ぶ理由もそれぞれ十分にあり、甲乙をつけることが困難であるような状況に置かれた場合、非決定論的世界においては、行為者が b を選んだとしてもそれは単なる偶然のなせる技であり、行為者が自らの意志をコントロールすることによってなされたものではないというのがヴァン・インワゲンやメレの言い分であり、b を選択するという意志を行為者が直接引き起すのでない限り、やはり非決定論的世界において自由意志は存在しないというのがペレブームの言い分である。

しかし、それでは、こうした状況において行為者が常に一方を選んだとすれば行為者は意志をコントロールする力を発揮したということになるのだろうか。ヴァン・インワゲンの巻き戻された世界で行為者は世界が再開されるたびごとに行為 a ではなく行為 b を選択するとしよう。神の隣でその様子を見ている人たちはどう考えるだろうか。行為者は a よりも b を好んでいるの

だと彼らは考えることだろう。きっと a を行う動機よりも b を行う動機の方が強いのである。そう主張する見物人に、行為者の内面を見透す神が、「行為者は a より b を好んでいるわけではない、a を選ぶ動機と b を選ぶ動機の強さは同じだ」と言ったとすればどうなるだろうか。見物人たちは、行為者は自分の意志によってではなく、外からの強制的な力によって b を選択させられているのではないかと疑うだろう。a ではなく b を選択する理由が行為者の心のうちにないとすれば、心の外にある何ものかによって選択が引き起こされていると考えるほかなさそうだからである。a と b が行為者の心のうちに現れた場合は常に b を選ぶように何かの力によって仕向けられているのである。こうして、決定論的世界においても行為者は自由意志を持たない存在として見なされるようになるだろう。

意志をコントロールする力の問題は決定論と非決定論の問題とは無関係であるように思われる。巻き戻された非決定論的世界では巻き戻されるたびごとに神がサイコロを振って行為者の選択を決めているのかもしれないし、決定論的世界では a のタイプの行為と b のタイプの行為の間で選択がなされる場合には、動機の強さが同じならば行為者は常に b を選ぶように神が決めているのかもしれない。一方の世界では行為者は自分の意志をコントロールしており他方の世界では行為者は自由意志を持っていないと考えることは不合理であるように思われる。選択の引き金を引く原因が、神のような心の外部にあるわけではないようなケースも考えられるだろう。同じ心的状態から、非決定論的世界では、ある時は a を選択するという決断が、別の時には b を選択するという決断が内発的に生じ、決定論的世界では常に b を選択するという決断が内発的に生じるのである。こちらのケースでも決定論的世界と非決定論的世界で行為者の自由意志の有無が違うということはあるまいかと思われる。

非決定論的世界において、a を選択する理由があり、b を選択する理由もあるものの、b ではなく a を選択する十分な理由も、a ではなく b を選択する十分な理由もない場面で、行為者が b を選択した場合、行為者になぜ a ではなく b を選択したのかと尋ねても、合理的な答えは返ってこないだろう。そのような答えはないからである。強いて問われれば、「b を選んだのは、なぜか b を選びたくなったからだ、なぜか b を正当化する考えが浮かんだのだ」と同語反復的に答えるしかないだろう。それでも、選択が神のサイコロ振りのような外部の要因によるのではなく、行為者の内部から自発的に生じたということは考えられることである。メレのランダム数字発生装置を思い起こしてみれば良い。装置が何故 7 ではなく 5 を発生させたのかという問いに答えることはできないが、それでも、5 という数字は、装置自身の内部状態によって生み出されたものであることには変わりがない。ところで、人間が行う選択に関しては、実は、決定論的世界の場合でも非決定論的世界の場合と状況は同じである。決定論的世界において、a ではなく b を選んだ場合でも、a を選択する動機の強さと b を選択する動機の強さが同じである場合には、なぜ同じような状況で自分はずっと b のタイプの行為を選択してしまうのか説明が付かないのである。理由を問われれば、やはり「いつも b を選んでしまうのは、なぜかいつも b を選びたくなってしまったからだ、なぜかいつも b を正当化する考えが浮かんでくるのだ」と同語反復的に答える以外にない。非決定論的世界においても決定論的世界においてもなぜか行為者は a では

なく b を選んでしまうのである。ここで、行為者因果を持ち出してきても何かが変わるわけではないことは言うまでもない。

非決定論的世界でも決定論的世界でも、行為者因果が存在するとしても行為者因果のようなものは存在しないとしても、いずれの場合でも行為者が自発的に b を選択するという状況はあるのである。私が自発的にテレビを見たのである限り、担任の先生が宿題をしてこなかった私をしかるのは正当なことなのであり、トルストイはやはり称賛されるべきなのである。

文献表

- Frankfurt, H. (1969), “Alternate Possibilities and Moral Responsibility”, in Frankfurt, H. (1998).
- Frankfurt, H. (1998), *The Importance of What We Care About*, Cambridge University Press.
- McLaughlin, B. P. and Cohen, J. (eds.) (2007), *Contemporary Debates in Philosophy of Mind*, Blackwell Publishing.
- Mele, A. R. (2014), *A Dialogue on Free Will and Science*, Oxford University Press.
- Peacocke, C. (2007), “Mental Action and Self-Awareness (I)”, in McLaughlin, B. P. and Cohen, J. (eds.) (2007).
- Pereboom, D. (2014), *Free Will, Agency, and Meaning in Life*, Oxford University Press.
- Strawson, P. F. (1962), “Freedom and Resentment”, in Strawson, P. (2008).
- Strawson, P. F. (2008), *Freedom and Resentment and Other Essays*, Routledge.
- van Inwagen, P. (1983), *An Essay on Free Will*, Clarendon Press.
- van Inwagen, P. (2017), *Thinking about Free Will*, Cambridge University Press.